

猥ザッブ

おほんへの情の姦

狂人喚く

人里は幻想郷でも栄えたところだが、その繁栄は平等ではない。生活区を北に外れると、ぼろ布や廃材で組まれた、建物というよりテントに近い粗末な住処がひしめきはじめる。この一帯こそ、里の恥部、貧民窟だ。

物理的にも政治的にも見通しが悪く、治安はよろしくない。女が一人で夜歩きするには適さない。だが白蓮は、そんなことはどこ吹く風で堂々と歩いている。やましいことなど何も無い。おどおどする必要がない。そういう考えだった。

むろん、彼女にも住人を無駄に刺激しない配慮は一応ある。だから、いつもの法衣ではなく、粗末なぼろを纏っていた。けれども、雰囲気がかういった場とかけ離れて上品で、器量もずば抜けており、ぼろの上からでもわかる女らしい身体つきをしているものだから、その程度ではごまかしどころか悪目立ちすることにしかなっていない。

当然、立ち並ぶぼろ屋のうちから、やたらに視線を浴びせられていた。ねっとりした、下劣をきわめた視線をだ。ぼろ屋の一つからにゅうと腕が伸びてきて、彼女を無理やりに連れ込み、不埒な行為に及ぼうとしても、おかしくはない。極めて危険な状況だ。しかし実際、そんなことは全く起こる心配がなかった。かういった無法地帯にも、無数の不文律からなる秩序が存在する。聖白蓮に手を出さないというのも、その一つだ。

貧相でごみごみした景色の中をしばらくくくと、この一帯を仕切る男の家にたどりつく。

権力者だけあって、家も周囲と比べて豪華だ。それでも、あばら屋と呼ぶのが精一杯だが。

「ごめんください」

「ああ聖さん、これはどうも。さあさあ、どうぞ、こんなところですが座ってください」

肥満体の男がのたのたと現れる。にこにこ笑顔を浮かべているが、打ち上げられた魚のような瞳をしており、左目のあたりには目脂がこびりついている。髪や髭は伸び放題で、得体のしれない汚れでごわついている。大きな団子鼻にはぶつぶつと脂が浮かんでいるし、剥きだした歯は黄ばんでいる。たるんだ顎のせいで首は半ば胴体と判別がつかない。身にまとう服——かつては服だったもの——は、白蓮の着ているぼろが上品に思えるほどで、これまた得体のしれない汚れが染みになっている。ところどころ開いた穴からのぞく肌は浅黒い。健康的に日焼けているのではない。風呂に入れないため、垢が溜まっているのだ。頭頂からつま先まで、いかにも浮浪者といった体だ。おおよそ、好意的に見られる人間ではない。けれども白蓮は彼に好意的に接していた。外見の悪さは、つきあい方を変える理由にはならない。それに、彼には、世話になっている。

小屋の中は異臭がした。そこらに積まれたゴミから漂っているのだろう。腐敗物特有の甘酸っぱい臭いに、汗と排泄物、カビの臭いが混ざっている。快いものではない。

気分がいいところではないが、それでも白蓮は上がった。男がゴミを押しつけたので、

そこに座る——座布団が出されないのは冷遇されているからではない。実際に無いのだ。床板が腐っているのか、妙な柔らかさを感じた。それでも、床のある家に住んでいるだけ、というより家に住んでいるだけ、このあたりではマシな暮らしをしているほうだ。

「すみません、来るのが遅くなってしまつて。最近はずいぶん……」

「いやいやいや、来てくれるだけありがたいですよ。我々のようなものは、お寺にも中々近づけませんので」

出張説法。それが、彼女がここを訪れる理由だった。

治安の悪さ、外部から見たとときの得体のしれなさ、住人の不潔さ……様々な要因から、貧民窟は人里で白眼視されている。命蓮寺は人妖分けへだてなく受け入れるが、里にある以上、彼らにとつては訪れづらい。

それならと始めたのが、出張説法だ。来るときはまず、男の家を訪れる。最初に地元の権力者にうかがいをたてるくらいの政治力は、白蓮にも備わっていた。幸い彼は好意的で、おかげで上手くいっている。

「おっと、お布施がまだでしたな。ええと、少しお待ち下さいよ」

男はゴソゴソと、ゴミの山の中をかき分け始めた。説法は、布施と引き換えということになつている。誓つて要求などしていないのだが——彼らの暮らしぶりを知っていれば、

要求できるはずがない——それでは気がすまないというのだ。そこまで言われると、断るのもかえって失礼になつてしまうので、受けることにしていた。

「おお、あつたあつた。これがないと、説法は始まりませんものなあ？」

男の手のひらの上の上のものを見、白蓮の表情が崩れる。彼の言うとおり、貧民窟で説法をするのに、それは欠かせないものとなつていた。

「ああ、早く、早くくださいそれ、早く」

ついつい、ねだつてしまう。いや、彼らが布施をしやすいようにしているだけなのだ。別に、どこにも浅ましい理由などありはしない。

男はにたりと笑つた。先ほどまでもにこにことしていたが、そのときの笑みとは違ふ、粘つく意地の悪いものだった。

「ええ、ええ、もちろんですとも。しかし、確か布施を受け取るにも、説法をするにも、ふさわしい姿というものがあつたと思うのですがねえ」

「ふさわしい——あつ、あは、分かりました、もちろんです」

言われてみれば、その通りだ。なぜ気づかなかつたのだろうか。結婚式に礼服、葬儀に喪服を着ていくように、なにごとにもそれに適した好格というものがある。彼から布施を受け取るにしても、その後説法に及ぶにしても、こんなぼろをまとつては——いや、

そもそも服をまもつていては、不適切というものではないか？

衣装に手をかける。そして彼女は、目の前に男がいるというのに、何一つためらわず、それを脱ぎ捨てていく。もともとが粗末な布切れだ。彼女が生まれたままの姿になるには、帯一本を解くだけでよかった。そうしてあらわになつた肉体を、一言で表すならこうだ。牝。

彼女の肉体が放つ色香は、尼僧にあるまじきものと表現してもよいほどのものだった。輪郭は本人の日頃のふるまいとは裏腹な、女として熟れたものだ。むっちり、ぼつてりと肉を載せている。だが、決して過剰ではない。

視線を引き付ける白く細い首筋のラインを下ると、いかにも女性らしい、なだらかな肩のラインにいきつく。注目を浴びるだろう部位は、そこから下だ。放埒に放り出された、見るものすべてを惑わせるような乳房。成人男性の手のひらにも余るほど豊かでありつつ、一切の型崩れを起こしていない。そのうえで、だらしなくはしたない乳という概念を体現しているかのような、ある種極まった曲線を描いていた。胸当ての類をつけていたなら、この完璧なラインは台無しになつていたに違いない。広めでやや濃い色合いをした乳輪は、ぶつくりと盛り上がっている。いわゆるパフィーニップルだ。

「おやおや、もう乳首が尖つていとは」

ねっとりとした視線が、そこに注がれる。彼の言うとおりに、先端の突起はすでに充血し、硬くなっていた。触れられてもいけないのだ。

彼女の乳房のあらゆる要素が、ぎりぎりのところで完璧を保っていた。もうわずかでも何かが狂っていれば、下品なものになりはてていただろう。間一髪のところだ。

そして、腹回り。たっぷり脂肪がついている。輪郭としてはくびれているというのに、肉は豊かで、間違いなくつまめるだろう柔らかさを彼女に提供している。むっちりという印象を彼女の肉体に抱かせる、最大の要因だろう。だが、単にこれを肥えていると評する者は、そのあまりの観察眼のなさと考えの浅さに、一生苦労するに違いない。彼女の腹は、そのような罵倒語で単純に表していいものではない。でなければどうして、触れてみたくなるような魅力をふりまいているだろうか。

「へへへ、相変わらず毛の濃ゆいことで」

男はかがみ、目を血走らせ、その部位をじっくりと見つめていた。彼女の陰部を。

腰回りは、実に女性らしい、丸みを帯びた柔らかな曲線を描いている。陰毛はきちんと整えられてこそいたものの、それでもなお、体質ゆえかふさふさと豊かに生い茂っている。ともすれば品がないと評されかねないが、こと彼女においては、それは淫靡であった。

花園は、朝露を浴びた草いきれのように湿っていた。原因はすぐそばにある。すなわち、

秘められるべき裂け目に。そこは触れられてもいないのにほころび、花開き、己を埋めてくれるものを求めているかのようひくひくとうごめいている。

「いやらしく涎え垂らしやがつてよお、淫乱が」

先ほどまでとはうってかわった、直接的な罵倒を男は吐いた。顔を出したときに見せた善良さは、どこかへ消え去っている。むちむちと肉の詰まった太ももの間に手が無造作に差し入れられ、当然のように秘具に触れる。ぬちゆりと耳に残る粘っこい音が響く。悪戯ですまない行為だが、白蓮は何も言わない。

「おら、後ろ向け後ろ。ケツ見せろケツ」

高圧的な物言いだった。従って当然といわんばかりだった。実際、白蓮は従ってみせた。この作業は、布施を受け取るのにふさわしい姿となる、いわば着替えだ。それを手伝ってくれている彼は、着付け師のようなものだ。着付け師にわざわざ逆らう意味もあるまい。

本来、美しい尻とは難しい存在だ。尻は、無駄な肉がつけば重力に従って垂れ下がるし、かといって下手に鍛えれば、むきむきと角ばる。丸い尻という表現はありふれたものだが、実際、その存在は非常に貴重なものなのだ。

その点、彼女の臀部は貴重な存在だった。全体的に豊かな身体の中でやはり豊かであり、しかし垂れ下がらず、丸く、張りがあり、白い。秋の夜に浮かぶ満月を思わせる。

男はそれを、腐臭のする息がかかりそうなほど近くで、ひたすら凝視する。こんな良い物を見られる機会はめったにないのだからと言わんばかりに。視線のいやらしさときたら、質量をもっているかのようだった。目線で尻を撫でられている。身体が、じんわりと熱くなる。白い肌に朱が差し、桜餅のような色合いになる。

「突き出せ」

「え？」

「分ツかんねえのかケツ突き出すんだよお理解力ゼロかお前？ オラ、さつさとやれ！」
 ぱあんと、小気味の良い音が響いた。肉を打つ音だ。男が白蓮の尻へ、右から左へ振りぬくような平手をくらわせたのだ。たわわな尻肉は、衝撃に小さく震える。

鋭い痛みと、遅れてじわじわ訪れる熱を覚えつつも、彼女は彼に従う。粗末な壁に手をつき——ささくれだっているの、棘に気をつける——腰を突き出して、尻を見せつける。はしたない二つの穴が、今まで以上に強調される。その前の方、ねっとりとした蜜を分泌する方を、もう片手でチョコキを作るようにして割り開いてみせた。

あらわになるのは、彼女の大切なところ、あらゆる人間の生まれてくる、狭い肉の道だ。生命の神秘の一端を担う神聖な道、心を許した相手のみに開かれるべき聖域が、見苦しく醜い男のもとに暴露されていた。

「えっ、へっ、へエ」

一度聞けば向こう一週間は耳にへばりつきそうないやらしい声が、男の口から零れた。言葉がなくとも、彼が興奮しているのは明らかだった——彼がその器官を、子をなすための大切な場所としてみていないこと、己の性欲を吐き出すための場所としてしかとらえていないことも、同様に明らかだった。

例の視線が、肉穴の隅々にまで注がれる。まるで、子種を放たれているかのようだ。

「嬉しそうにヒクつかせやがってよお、本当に僧侶なのかよお前、ええ？ 経唱える口でチンポしゃぶって、通夜つつつて檀家食い散らかしまくってんじゃねえのか？ マンコが淫乱すぎんだよ、マンコがよお、マンコが」

黒ずんだ指が、あざやかな桃色の裂け目に、当然のように入り込んでくる。肉襞は期待していた侵入者を歓待し、それに絡みついた。

「ほほ、相変わらぬスケベマンコだ。キンタマ搾り取るためにあるような穴だなア？」

「アツ、は、アツ、んんっ」

にちやにちやと、唾液が糸をひく音を立て、男は罵ってくる。好き勝手に指を抜き差しされ、喉の奥から甘い吐息が溢れる。

「へっ」

期待せずにはいられなかったのだが、男はそれを裏切る。指を引き抜いてしまったのだ。半端にかき回されたせいで、腹の奥に切なさが残る。

「物欲しそうな面して、なあにケツくねらせてんだ？ 尼がマンコ弄られたがつてんじゃねえっつーの。……忘れてんじゃねえぞ、説法の前には、布施だろうがよ？」

「あ——」

彼女の眼の色が変わる。すっかり忘れていた。なぜこんなことをしていたのか。布施を受け取るためではないか。彼女の目の前に、布施は差し出されていた。手のひらの上の、三粒の錠剤。それこそ、待ち望んでいたものだった。

「あ、あ、あ、あひ、それ、早く、ください、ちようだい、おくすり」

命蓮寺の住職がこのような媚びた、一方で必死でもある声をあげると、彼女を知る者は思わないだろう。だが、こうなるのも仕方ないことなのだ。コレを使うとどうなるか——それはもう、ひたすらにスゴいのだ。見ているだけで、思い出す。思い出すだけで、世界が虹色に輝き始めたかのように感じられる。

「そうかそうか、まあ気持ちは分からあ。でもよお、俺らは苦しい生活の中で、アンタのために一生懸命コレを手に入れてるわけだけぜ？ 欲しいってんなら、それなりのお願いの仕方ってもんがあるんじゃねえの？」

そもそも——この会が本当に健全な説法であったころ、白蓮は決して、布施を寄越せと言っていない。重ねてになるが、彼らが主張するから仕方なく受け取っていたのだ。だが、そんなことを指摘するほど、彼女はほかではなかった。彼の機嫌を損ねてもして、アレが手に入らなくなってしまうたら？ そのほうがよほど問題だ。

今の彼女には、本当にそれが必要だった。ゆえに、手に入れるための手段を選ぶことはなかった。腐食した床板に膝をつき、手をつき、額をつけた。古式ゆかしい服従の姿勢、土下座。

「お願いします、どうか、どうかお布施をくださいませえっ」

寺の者が見れば、卒倒するだろう。立場のことなど、今ばかりはどうでもよかった。

「そうかいそうかい、そんならくれてやるかねえ」

「あああつ、ありがとうございます。ありがとうございます」

弾かれたように頭を上げる。砂漠を三日彷徨った者がオアシスを見つけ、水を掬おうとするような手つきで、白蓮は両手を差し出した。男は、彼女の頬に平手を食らわせた。

「なアにお上品にいただこうとしてやがる。受け取り方つてもんがあんだろオが？」

ふさわしい格好があるなら、ふさわしい姿勢も、当然ある。上を向き、舌を突き出した間抜けな表情を、彼に見せる。男はニヤニヤ笑っていた。

「そうそう、それだよ。ほれ、くれてやる」

「あはああっ——」

舌の上に、待ち望んでいたものがようやく載せられる。彼女はすぐさま口を閉じ、嚙下する。効いてくるのが待ち遠しい。

「さあてえ、布施はしたんだ、説法の時間だぜ、尼僧様よお」

(体験版はここまでです……製品版をよろしくね!)